

平成24年5月8日

担当 第6学年 藤原真由美

1 ねらい

- ・地底の森ミュージアムと縄文の森広場の見学を通して縄文時代の人々の暮らしや社会の様子について理解を深める。
- ・石器作りや勾玉作りの活動を通して、縄文時代の人々の知恵を学び、道具の発展と文化に興味・関心を待つ。

2 評価

地底の森ミュージアムと縄文の森広場の見学を通して縄文時代の人々の暮らしや社会の様子について理解を深め、興味関心を持って活動に取り組むことができたか。

3 学習活動について

- ・教科・・・社会科
- ・単元名・・・縄文のむらから古墳のくにへ
- ・ねらい・・・縄文時代の人々の暮らしや知恵、社会の様子を理解する。

4 事前指導

社会科「村ができるまで」の単元で、縄文時代の人々の生活の様子や社会の様子を学ぶ。また、弥生時代との比較も考える。

5 当日の指導（活動）内容

（1）見学学習

- ・復元住居・遺構表示等の屋外展示及び館内の展示見学を予定
- ・探検シートを用いて自主学習

（2）体験学習

クラスごとに勾玉作りと、石器作りを体験学習する。

6 事後指導

ワークシートの記入と確認、感想の記述

利用学習報告書

平成24年 6月12日
担当 第6学年 藤原真由美
齋田 淳一
河田 裕子

1 事後指導について

(1) 実施日

平成24年 5月16日(水) 1校時

(2) 主な内容

- ・社会科の授業で、学習ノートの内容を確認し、補足説明をした。
- ・体験・見学を通して分かったこと、考えたことなどを学習感想としてまとめた。その後、感想の発表を行い、それぞれが調べたことや考えたことを共有した。

2 送付する資料

児童の学習感想(11名分)

地底の森ミュージアム 学習感想

新人であるホモサピエンスは、2万年前にぼくたちとほぼ同じような姿になったそうです。猿人・原人・新人の頭がい骨を見てみると、時代が進むごとにあごの形が変化し、脳の大きさも大きくなっていることに気付きました。人類は、何十万年、何百万年という時を経て、やっと現在の姿になったことが分かりました。住む場所、環境の変化に対する適応力におどろきました。

地底の森ミュージアムに行き、様々なことが分かりました。

まず1つ目は、2万年前の人々の暮らしです。旧石器時代の人たちは、移動しながら、動物を狩り、生活していたことが分かりました。このことから、むらはなく、小さなグループで旅のような生活をしているのだと思いました。

2つ目は、旧石器時代の富沢の自然についてです。今とはちがい、湿地が広がり、木は大きく、とげとげしたような葉の木がたくさん生えていたことが分かりました。それに、気温が今よりも7度から8度も低く、今生えている木はほとんどなかったそうです。気温が低いということから、旧石器時代の人々は寒さにたえる工夫もしていたのかなということが想像できました。

ぼくが地底の森で学んだことは、2万年前の仙台の様子や人々の暮らしです。昔の人々は、自分たちが生きていくための多くの知恵をもっていたことが分かりました。

1つ目は、道具についての知恵です。旧石器時代の人々は、その名の通り、石器を作り、それを使って生活していました。夜にこわれたやり先を付けかえて、次の日の狩りに備えていました。

2つ目は、食べ物についてです。狩りで獲物がとれなかったときは、干したシカやウサギの肉をたき火で焼いてから食べていました。ぼくは、今の時代より昔の方が命のありがたさがずっとよく分かっていたのではないかと思います。

縄文時代よりずっと昔の旧石器時代からやりなどを使って狩りをしていることが分かりました。石器作りをしてみて、昔の人々はいろいろ大変なんだと知りました。山形県から頁石をとってきて、それをシカの角でたたいてするどくして、獲物を探してとって、切り落として焼いて食べる。そんなことを続けてすごく大変なのに、今は食糧を簡単に手に入れることができる。さらに、昔の人々は、地底の森の先生のように詳しく知っていて教えてくれる人はいないのに、生きていくために自分たちだけでいろいろなことに挑戦し、自分たちだけで学んでいる。昔の人々に知恵はすごいということが分かりました。

旧石器時代の人々が作っていた石器は、いろいろなことに使われていることが分かりました。体験では、ナイフ型の石器を作りました。葉っぱのような形が一番いいそうです。先生の石器についてのお話を聞いて、今ではお金で手に入る道具も、昔はすべて自分たちで、手作業で作っていたことも分かりました。わたしは、昔の道具には、その時代の人々の知恵と努力が詰めこまれているのだと思いました。富沢遺跡は、すごい遺跡だと思いました。これからも日本の歴史のために、大切に残してほしいと思いました。

縄文の森広場 学習感想

縄文の森広場があるのは、およそ4000年前の遺跡、山田上ノ台遺跡というところです。たて穴住居に入ってみて、見た目よりも意外に中が広がったことにおどろきました。家はすべてクリの木など自然のもので作ってあり、その頃の技術でこれほどの家を作ったのはすごいと思いました。使っていた道具もすべて縄文人たちの手作りのものでした。穴をあける道具、木の実をすりつぶす道具、獲物をとったり、調理したりするための道具などがありました。ものを運んだり、川や海で魚をとったりするための丸木船もありました。また、地面に穴をほり、木の実を入れてたくわえたり、魚や肉を干してくんせいにしたりと、食べ物を保存していました。縄文時代の人々は、様々な工夫をして生活していることが分かりました。

縄文の森広場には、縄文のむら広場というところがありました。そこには、たて穴住居や落とし穴のあとなどがありました。たて穴住居の入口は、南側にありました。縄文時代は、電気も何もありませんでした。だから、日光が一番入りやすい南に入口がつけられたのだと思いました。施設内には、縄文人が作った道具がたくさんありました。わたしが縄文の森広場に行って学んだことは、縄文時代の人々は、何もない時代でも、自分たちで狩りをして、道具を作って、工夫して、自分たちの力で生活していたということです。知恵と技術で、一生懸命に生活していたことが分かりました。

縄文人は、環境にやさしい生活をしていたそうです。暮らしを支えてくれる森などの環境を大切にし、食べ物になるものは何でも食べ、道具はこわれるまで大切に使っていたそうです。たて穴住居は、クリの木でつくり、太陽の光が入るように出入口が南にありました。

縄文の人々は、家があり、そこで家族といっしょにくらしていました。また、いくつかの家が集まり、むらをつくっていました。狩りをしたり土器などの道具を作ったりして生活していましたが、それには仲間との協力が必要です。縄文時代の人々は、仲間を大切にしたのではないかと思います。そして、それは、生きていく中で、自然に、当たり前にならぬ身につけていったのだと思います。

縄文人が身につけていたアクセサリーの一つ「勾玉」を作りました。身のまわりにあるものを利用して作っていたことが分かりました。縄文人たちが全員勾玉を身につけているわけではないことが分かり、人それぞれ自分なりにおしゃれを楽しんでいたのかなと思いました。また、おしゃれのためだけでなく、魔よけのためもあるということも分かりました。

縄文時代の人々は、今では考えられない生活を送っていたのだと改めて思いました。

たて穴住居は、思ったよりせまくて、小さくてびっくりしました。土器の中を見て、さわったときは、じょうぶに出来ていて、おどろきました。縄文時代は、狩りをしたり木の実などをとったりして、食糧を自分たちで手に入れていた時代だということは学校で習って知っていましたが、実際に見たり体験したりして、さらに興味がわきました。